



うものが小学校から大学までずつとなされて、実証されないものは信じてはならないし、認めてはならないというような思考が、先生方から僧侶に至るまで浸食してしまった感がある。それが宗教世界の最も大事な点を食いつくし、衰弱させてきた。併せて檀信徒もまた、そういう意味では知的になって、太古から民俗的に継承されてきたマジカルなものを認めなくなつたということもある。

新宗教の真如苑といった教団では、実はいまでも霊媒が教団の裾野にたくさんいて、若い人たちも取り込んでいる。ところが既成教団は科学の時代が来たら科学に乗っかっていけば良いという路線を歩んできたために、大事な部分を自ら切り捨て、教団自体を弱体化させてきたという面がある。ではないかと思うのだ。

少し整理すると、例えば曹洞宗だと「只管打坐」、これはひたすら坐禅をすべきであつて、何かの目的を達成するために坐禅をするのは間違つている、坐禅を手段化しては駄目だという。これは宗教か呪術かという宗教学的には古くからの議論があつて、ある目的のための手段としてある力なり価値なりを使うのが呪術であり、宗教というのはあくまでも目的であつて、手段というものはないという。

これは、二十世紀初頭イギリスの社会人類学者フレイザーなどによって言われた学説であるが、果たして呪術と宗教はそんなにきれいに割り切

れるものかどうか。私はやはり宗教というものの一番根っこには、どこであれ呪術的なもの、いかなければ神秘的な力によって何かを解決するといふものがないと、それは宗教になつてこないと思うのである。

仏教はそれを乗り越えているとは言うが、それはやはりインテリであるとか特殊な教理を一所懸命やつた人の世界であつて、学会で通用はするし、偉い博士がこういうことを主張したということではそれは通るけれども、檀信徒のレベルでは、知的な住職は思想とか知識を持つているから集まつて来るかという、私はそうではないと思う。

知的なものを持つていてかつ坐禅を一所懸命して、禅をするということにおいてはそれで自己完結しているのだから、手段化してはいけないと言つても、檀信徒にはもつとプリミティブ(原始的、根元的)な欲求があつて、あのお坊さんは修行しているから「力」を持つていて、お願いすれば亡き人は成仏するし間違いないあの世界で安定するという思いがある。

本来、マジカルなものまで含めてお坊さんはそういうものを持つていたのに、近現代ではそれを分けてしまつて、大事な支え手であるパワーとか霊というものを切ろう、切ろうとして来た。それが筋肉質のお釈迦さまをだんだん削いでいって、骨格だけが体系であるとか組織であるとか言つて、われわれは示そうとして

ているのではないか。そんな感じがしている。

「この世」と「あの世」は太陽と月の関係

最近の告別式の弔辞では、「大変な人生を送られたからどうぞ天国でお休みください」というようなことをよく聞くのであるが、私は、それは少々ふさわしくないのではないかとと思う。あの世に行つても眠りには必要だけれど、永遠に眠りにつくのでは、「何回事」といつて拝む必要がなくなつてしまふ。だから宗教者は、「眠つてはいるのではありません、向こうに行つても活動は続いているのですよ」と言うべきであるのに、世間的な傾向に流されていくような気がするのだ。

死者は遺骨になればそれで終わりというのではなく、あの世に行つても、何らかの存在としてこの世と交流が続いていく。それを否定したら世界は成り立たない。この世だけというの、昼だけあつて夜は要らない、太陽だけで月には要らないというものは、この世があるということではあつていかないし、あの世がないとこの世も成り立たない。この世と死者を切り離すことはできないし、両方連結しているから宗教というものが必要になつてくる。それから私は、呪術と宗教というものはあり得ないのだ。

あつて、呪術的なものがなかつたら宗教もあり得ないと思つている。一つ例を挙げると、イギリスの人類学者ジェームズ・フレイザーが百年ぐらい前に書いていた話として、フランスのカソリックの教区で神父を選ぶ際、どういふ基準で選ぶかというところ、それは自然現象とか難病などに対して作用する力を、どれほど持つているかということだ。

例えば、ブルターニュ地方は良質のワインの産地として有名で、ブドウ畑が一带に広がっている。ところが、ブドウの収穫期に台風が来てブドウが被害を受けると、その地域は経済的に大打撃を受ける。だから、どの神父が一番、台風風の向きを変えたり、被害を軽減する「力」を持つていて、かどうかが問題になるわけである。

教会に行つてある神父にお願いしたけれど、台風がまともに来たとなつてその神父は駄目だということ、排斥されたら台風が向こうに行つたとなつて、その神父はパワーがあるということ、信任を得る。フレイザーは、それは



導によつて火葬し、収骨したら寺内に入れて供物台を置いて、僧侶に読経してもらい、お布施をそこへ置く。私が言いたいの、宗教という文化に呪術的なものがなかつたら、「思想で食べている哲学者」の財産にはなつても、現場で苦しんでいる人々のためにはならないのではないかと、いうことである。

ユングが強調した「不死」といふ概念

二十世紀最大の心理学者であり、精神分析者の一人とされるC. G. ユングというスイスの学者はこう言つていふ。「死してもなお生きていふものを「不死」と呼ぶ。死者ですから「霊」と言つてもいいのですが、そういう存在は人類によつて太古から知覚され、経験されてきた実在である」と、そう論じている。

ユングは、「不死」、死者の観念は、全地球上に偏在する人間の心的生活の特徴であるから、なにゆえにそれが真実であるかという証拠を何ら必要としない。人類が太古から持つてきた「不死」といふ観念はあるし、心理的事実としてわれわれは受け止めてきた。だから、今さら「不死」があるかないかというふうなことを検証する必要はない、とも述べている。

さらにまた、「不死」の観念は、つまり死者の観念は、人間の心が正常に機能するのに必要なものと納得すべきものだ。われわれ人間が

大の世界の知性の一人がここまで言つていふのは、ユングの言う心理的事実とかなりアリの科学的な実験で死者の世界があるとかないとか証明しようというのは無意味なことであつて、それこそ愚鈍だと言つている。ユングは、科学的な実証と心理的なりアリのことをはつきり区別しているのだ。

死者は常に私たちの身近にいる

「あの世」といふ発想はもともと西方十億土にある「お浄土」といふような浄土の教えから出てきたので、インドでは十億土といふものすごい天文学的な概念にあると考へた。それが日本へ来ると、教理上は十億土の概念は浄土宗でも浄土真宗でもお墓を非常に大事にする。大谷霊園などというのは大変なと

ところで、そこへ墓地を置くことと自体が大変難しい。浄土に往生していたら何もお墓を拜む必要はないのに、日本人はお盆になるとまづお墓に行く。「古事記」「日本書紀」に出てくる伊邪那岐(いざなぎ)、伊邪那美(いざなみ)の物語では、伊邪那美が亡くなつて、あの世に行つてしまふ。絶対に来てはいけないといふのに夫の伊邪那岐が訪ねていく。その距離はどのくらいかというところ、それほど遠くはない。つまりそれは墓場である。墓場に行つて掘り返したのか、中の石窟を見たのかは分からないが、それが八世紀以降の日本人のあの世になつていて、その後、仏教が盛んになつても基本的には変わらなかつたと言へるのではないだろうか。

ところが昨今、浄土真宗の先端的な教学では、浄土は地理的なロケーションとしてのかたにあるのではなく、今生きている人間の心の中にあるのだと説く人たちがでてきた。それに対して、そうではない、浄土は客観的に実在すると従来の教義を説く人といふ論争が続いている。

難しい問題だが、今回の帰結としては、知識人や教団の指導層は別として、一般の檀信徒、仏教を支えている側にとつて、あの世というのは決して遠くにあるのではなく、お墓にも位牌堂にも、仏壇にも、あるいは「お浄土」にも重層的にあるというところではないかと思つているのである。

『参・宝』の研究文献

四、こつて

面山瑞方

卍山道白と天桂傳尊という両巨頭の『参・宝』についての所論をみてきたが、次はいよいよ面山瑞方(一六八三〜一七六九)の出番である。面山といへば、わが曹洞宗では近世江戸時代を代表する最大最高の宗学者とされている。たしかに、面山がもつた生涯の著述類は、驚くなれ三千年以上多きに達するといわれ、その右に出る人はいない。禅門、特に臨済宗に目を転ずると、面山のやや先輩に無著道忠(一六五三〜一七四四)がいるが、その著作は一千巻前後とされるから、面山には遠く及ばない。面山の夥多はざば抜けていて、仏教界随一と称されているのだ。

面山の生まれは、熊本県鹿本郡植木村味取。熊本市の西北に当る。俗姓は今村氏。幼少から聡明で、六歳の時、兄が住していた頓了房まで往復し、神呪を唱えていた。一六歳の時、母を喪い、独りで墓所に詣で、自ら落髪して出家を決意。父が流長院(熊本)に連行し、遼雲について出家得度し、瑞方の諱を受けた。修行ののち江戸に上り、青松寺(東京都港区愛宕)に掛錫修道。この時、偶々宗統復古運動のために滞在中の卍山道白・徳翁良高・損翁宗益という宗門の碩徳たちにまみえ、その中の損翁に随侍を願い出、住地の仙台泰心院(仙台市若林区)に赴き、遂にその室に入つて

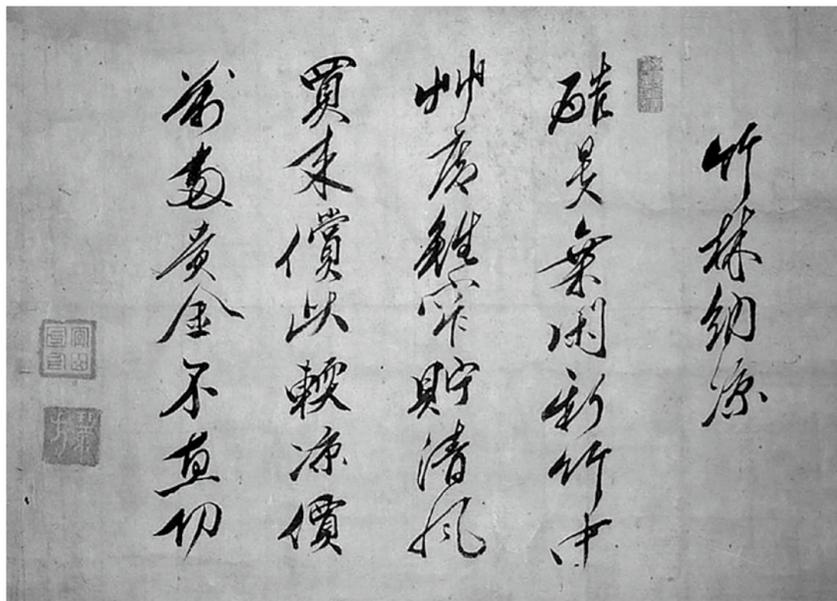
『参同契・宝鏡三昧』に学ぶ

3

一四年(二七二九)には若狭空印寺(福井県小浜市)に移住。寛保三年(二七四一)には永福庵(福井県小浜市)を開創したが、明和五年(一七六九)、京都建仁寺西来院に飯偶。この間、諸方での戒会・講録・撰述に寧日(穏やかな日)なし。翌明和六年九月、遺偈を拒み安然として示寂。世寿八七。法嗣



千葉県柏市 龍泉院東堂 椎名宏雄



面山瑞方禪師筆「竹林納涼」(新潟県五泉市村松町 慈光寺所蔵) (筆者撮影)

集成たる『石門文字禪』は、わが国の下野(栃木県)黒羽大雄寺廓門貫徹(生年不詳、一七三〇、十三世)による世界唯一の渉典録が宝永七年(一七一〇)に完成して刊行されていることを喜びたい。この刊本には、洞済の名学匠たる出山道白と無著道忠の両序文、それに黄檗宗月潭道澄の賛語を付した豪華版である。私が解題を書いた「禅学典籍叢刊」第五卷(京都、臨川書店、平成十二年十月刊)の中に影印収録することができた。最後は「歌」の問題。唐代

禅宗文献で「歌」を付したものを探索するには、第一の資料は『景德傳燈録』であり、卷三〇の末に「銘記箴歌」のタイトルで二三項の偈頌作品が集められている。読者の中には全く興味のない方もおられるでしょうが、中国の禅は日本の禅を生む母胎でありますから、勉強のために少々ガマンしてください。二三項の作品とは、つぎのようなものである。

心王銘・信心銘・心銘・息心銘・略弁大乘入道四行・顯宗記・參同契・心要・坐禅

箴・証道歌・了元歌・懶瓚和尚歌・草庵歌・樂道歌・一鉢歌・浮漚歌・古鏡歌・三昧歌・翫珠吟・獲珠歌・歸寂吟・心珠歌

さあ、いかがですか。案外ご存じの作品名も多いのではないのでしょうか。問題は、これらすべてが朗詠されていたかどうかです。むしろ、音符は全く伝えられていません。

『参』は五字×四四句、二二〇文字、『宝』は四字×九四句、三七六文字、これが各基本で独立した節を持っているから、それぞれ音曲をつければ堂々たる仏教歌なのであるが……。

なるほど、日本では伝統的にお経はお経、詠讚は詠讚として独立して詠唱されているが、中国ではそれらが僧俗一体の仏教音楽として同道唱和される伝統が培われていることを理解すべきであらう。それは仏教の歴史では中国が創始ではなく、インド以来の伝統の展開なのである。仏教と「歌謡」の縁は深く、經典の原初形態は、短い語句を連ねた偈頌の如きものであり、あたかも長行と偈頌(これを重頌とも称する)の形態・体裁でもって仏説が世間に敷衍されたといわれる。中国では大古からの詩歌の伝承があり、これに隋唐代から西来音楽という文化の受容と共に仏教儀礼も音楽的要素が強くなり、仏菩薩を讃嘆する行法としていわゆる梵唄の大きな展開をみた。こうした背景によって、偈頌類も多く歌曲的な展開をとげたのは、むしろ時代の必

論 一巻の所説をみよう。まず面山は本書の初めに、北宋代に覚範慧洪が著した「禅林僧宝伝」の記事を批判する。すなわち、曹山が洞山良价から大法付属された際に疎山匡仁がこれを盗取したとする記事、また「宝鏡三昧」が葉山・雲巖の作品に擬せられるという記事を、いずれもんでもない誤説であると貶すのであり、その根拠として、世に流布している「重編曹洞五位」三巻があり、また「五位顯訣注」は洞山の創説なのであるから、「宝鏡三昧歌」「玄中銘」「雪子吟」「綱宗三偈」などの同調の詩語はみな洞山の作品であると、論述する。こうした論述の上に立って、「宝鏡三昧」には「歌」を付すべきという次の論陣を張るのである。

面山が肥後にいた時、菊池郡熊耳山正観寺という、蘭溪道隆の法孫、大方元恢が開山した寺において、朝鮮本「景德傳燈録」を借用して読んだ処、卷三〇に「宝鏡三昧歌」

があった。これは前述の晦然の言と同じで、今日日本で流通している本は、覚範・雲外・永覚・行策などはみな「歌」を脱している。その淵源は覚範にある。洞山は、歌のように誰でもこれを歌って仏道に入れるように、「証道歌」や「草庵歌」と同様に「歌」を付したのだ。それを覚範や永覚は何たる事をしてくれたのか、歌曲三百六十言という大法を汚辱するにもほどがある。と声を大にして論難している。

不勉強な私は、面山を大いに讃仰した割には、面山の著述などめつたに拝読をしているわけではない。だが、右の「歌謡」の部分は例外であり、実は若い頃から熟知していた。それはなぜかといえば、本論からは垂流となるが、昔、私が「景德傳燈録」の文献研究に血道を上げていた頃、偶々右の「吹唱附歌論」の所説に気づき、駒大図書館に二本もある朝鮮版「景德傳燈録」の研究に先鞭をつけたことがあったからである。

それはそれで成果があり、この一千七百の公案集といわれ、禅門で古く最高権威とされる燈史書の『景德傳燈録』(一〇四)の中に「宝鏡三昧歌」が初めて登場するのは、『五燈会元』(二五三)の記事の影響を受けた高麗版からなのであるが、面山は、よくまあこんな特殊文献にまで目を光らせておられたものよと、改めて感伏しきりである。

感伏ばかりしては一方通行。あの「婆々面山」といわれた方にして、覚範や永覚に対す

る批難の強さはどうしたことか。これは、それだけ高祖道の核心の何たるか、宗乗の中心はいつこにあるかの信念の強さに基づく言説・論難ととらえておきたい。洞山を五位思想の創始者とみることは、前述のように私としては、やはり古く素朴な燈史文献である『粗堂集』(九五四)の中のどこにも、洞山との関連字句が見出せない以上は、疑問であるという考えは、先述「洞山」中でも述べたとおりである。

それはともかく、面山はこれらの洞山に対する絶対的な信条に立ち、論拠の文献史的究明などを超えて、純篤直亮的な見解を披歴した、とみるべきであろう。面山の頃は、そうした宗教界の状態が優先だったのである。ただ、それでもなお、われわれは覚範と永覚についての理解をし、及び「歌」字の付否については考えておきたい。

まず覚範慧洪(一〇七一〜一一二八)と「禅林僧宝伝」。いずれも本邦の曹洞宗ではあまりなじみがないので、ここに略述しておく。

覚範。初名は徳洪である。北宋代初期の人で、臨済宗黄龍派の巨匠。やや遅れて世に出た大慧派の開祖、大慧宗杲

ジャーナリストの西村一郎さん(七十二歳)は、両親と過ごした幼少期の原体験から平和な社会の実現を願い、食の安全を主軸にした活動を続けています。二〇一一年の東日本大震災後は継続的に被災地を訪れて取材し、現在までに被災地関連の書籍を8冊出版されました。西村さんは震災

フリージャーナリスト
西村一郎氏インタビュー

これまでお世話になった方との関係性を大切にしています

聞き手 柳澤円

以前からも平和活動を積極的に行い、特に一九四五年に広島で爆撃した植物「インドハマユウ」を繋ぎ広めることを目的とした「被爆ハマユウ・クラブ」の活動を通して、国内外を訪問しています。各地での交流を通して、宗教の存在を意識した時のことや気づきについてうかがいました。

は二七名。生涯説法の語録はほぼ一百巻、うち現存するものは約三分の二であり、『広録』二六巻、『逸録』一二巻を遺す。他の彫大な撰述書の特徴は、高祖道元禪師を讃仰・追慕・布衍した作品が圧倒的であり、他の追隨を許さない。

もう少し面山について。面山の法孫に属した方々の数は、現在まで二五〇年間で約六百萬(『曹洞宗系譜』による)であり、宗門全体としては決して突出した数ではない。しかし、その法孫は「永福会」という組織を持ち、今なお十年ごと小遠忌を営むばかりか、顕彰の出版活動を行っているのだ。まさに宗門的な慶事かつ大浄業というべきであろう。いま筆者の手元にあるその刊行物を挙げると、

- ①『永福面山撰集』(二百回忌遠忌記念、昭和四三年四月)
- ②『面山和尚法縁系譜并門人考』(同、昭和四六年八月)
- ③『永福面山禪師宝物集』(二四〇回小遠忌記念、平成二〇年九月)

の三書があり、これだけでも驚くべき刊行物であり、みな面山の遺徳を物語るものである。

さて、その面山の『参・宝』に対する姿勢といえは、一語でいえば宗乗の帰趨と把えて

いるといえよう。著述としては、『参同契吹唱』と『宝鏡三昧吹唱附歌論』の二書が直接的なもの。ともに「統曹洞宗全書」注解二に含まれている。「吹唱」とは「笛を吹き歌をうたう」唐歌風意味だから、楽器と歌声が一致調和することを、「参・宝」のよきハーモナイズにかけて用いていたのであろう。事実、『吹唱』の所論は邦人の見解には概して従順であり、殊更に異を唱える如き態度はみられない。法眼文益の語句に対して然り、瑯琊慧覚の科段の区切りに対し、前述したように出山が見誤った箇所は、整然と「大科」と「科」の各分限に分けて処理しているのはさすがである。

また面山は、瑯琊は梁山緑観によって出家得度し、湖南の原語に熟練していたから、科段の区分は法眼と同じなので、彼らの説を根拠とすると述べ、その上に立って宏智正覚の語句を用いて解説の標準とするのだ、とその依って立つ根拠を明白に示している。

次に、『宝鏡三昧吹唱附歌



面山瑞方禪師自贊頂相 (新潟県五泉市村松町 慈光寺所蔵) (筆者撮影)

論 一巻の所説をみよう。まず面山は本書の初めに、北宋代に覚範慧洪が著した「禅林僧宝伝」の記事を批判する。すなわち、曹山が洞山良价から大法付属された際に疎山匡仁がこれを盗取したとする記事、また「宝鏡三昧」が葉山・雲巖の作品に擬せられるという記事を、いずれもんでもない誤説であると貶すのであり、その根拠として、世に流布している「重編曹洞五位」三巻があり、また「五位顯訣注」は洞山の創説なのであるから、「宝鏡三昧歌」「玄中銘」「雪子吟」「綱宗三偈」などの同調の詩語はみな洞山の作品であると、論述する。こうした論述の上に立って、「宝鏡三昧」には「歌」を付すべきという次の論陣を張るのである。

面山が肥後にいた時、菊池郡熊耳山正観寺という、蘭溪道隆の法孫、大方元恢が開山した寺において、朝鮮本「景德傳燈録」を借用して読んだ処、卷三〇に「宝鏡三昧歌」

があった。これは前述の晦然の言と同じで、今日日本で流通している本は、覚範・雲外・永覚・行策などはみな「歌」を脱している。その淵源は覚範にある。洞山は、歌のように誰でもこれを歌って仏道に入れるように、「証道歌」や「草庵歌」と同様に「歌」を付したのだ。それを覚範や永覚は何たる事をしてくれたのか、歌曲三百六十言という大法を汚辱するにもほどがある。と声を大にして論難している。

不勉強な私は、面山を大いに讃仰した割には、面山の著述などめつたに拝読をしているわけではない。だが、右の「歌謡」の部分は例外であり、実は若い頃から熟知していた。それはなぜかといえば、本論からは垂流となるが、昔、私が「景德傳燈録」の文献研究に血道を上げていた頃、偶々右の「吹唱附歌論」の所説に気づき、駒大図書館に二本もある朝鮮版「景德傳燈録」の研究に先鞭をつけたことがあったからである。

それはそれで成果があり、この一千七百の公案集といわれ、禅門で古く最高権威とされる燈史書の『景德傳燈録』(一〇四)の中に「宝鏡三昧歌」が初めて登場するのは、『五燈会元』(二五三)の記事の影響を受けた高麗版からなのであるが、面山は、よくまあこんな特殊文献にまで目を光らせておられたものよと、改めて感伏しきりである。

感伏ばかりしては一方通行。あの「婆々面山」といわれた方にして、覚範や永覚に対す

る批難の強さはどうしたことか。これは、それだけ高祖道の核心の何たるか、宗乗の中心はいつこにあるかの信念の強さに基づく言説・論難ととらえておきたい。洞山を五位思想の創始者とみることは、前述のように私としては、やはり古く素朴な燈史文献である『粗堂集』(九五四)の中のどこにも、洞山との関連字句が見出せない以上は、疑問であるという考えは、先述「洞山」中でも述べたとおりである。

それはともかく、面山はこれらの洞山に対する絶対的な信条に立ち、論拠の文献史的究明などを超えて、純篤直亮的な見解を披歴した、とみるべきであろう。面山の頃は、そうした宗教界の状態が優先だったのである。ただ、それでもなお、われわれは覚範と永覚についての理解をし、及び「歌」字の付否については考えておきたい。

まず覚範慧洪(一〇七一〜一一二八)と「禅林僧宝伝」。いずれも本邦の曹洞宗ではあまりなじみがないので、ここに略述しておく。

覚範。初名は徳洪である。北宋代初期の人で、臨済宗黄龍派の巨匠。やや遅れて世に出た大慧派の開祖、大慧宗杲

る批難の強さはどうしたことか。これは、それだけ高祖道の核心の何たるか、宗乗の中心はいつこにあるかの信念の強さに基づく言説・論難ととらえておきたい。洞山を五位思想の創始者とみることは、前述のように私としては、やはり古く素朴な燈史文献である『粗堂集』(九五四)の中のどこにも、洞山との関連字句が見出せない以上は、疑問であるという考えは、先述「洞山」中でも述べたとおりである。

それはともかく、面山はこれらの洞山に対する絶対的な信条に立ち、論拠の文献史的究明などを超えて、純篤直亮的な見解を披歴した、とみるべきであろう。面山の頃は、そうした宗教界の状態が優先だったのである。ただ、それでもなお、われわれは覚範と永覚についての理解をし、及び「歌」字の付否については考えておきたい。

まず覚範慧洪(一〇七一〜一一二八)と「禅林僧宝伝」。いずれも本邦の曹洞宗ではあまりなじみがないので、ここに略述しておく。

覚範。初名は徳洪である。北宋代初期の人で、臨済宗黄龍派の巨匠。やや遅れて世に出た大慧派の開祖、大慧宗杲

慧洪と称す。以後、經学を修し雲庵克文に師事。二九歳、東吳(蘇州)に遊学し、翌年衡岳(湖南)に移り遂に開悟。以後は、住持・投獄・剝僧・復歸・講述・投獄・流配・恩赦・入獄・釈放などを繰り返す間、『林間録』二巻、『禅林僧宝伝』三〇巻等を著し、建炎二年(一一二八)、同安院で示寂。世寿五八。他に『智証伝』『冷齋夜話』各一〇巻、『石門文字禪』三〇巻が有名。

特に宣和四年(一一三二)に成る「禅林僧宝伝」三〇巻は、唐末〜北宋期(九世紀末〜十二世紀初め)までの約二五〇年間に江西を中心に活躍した禅僧八一名の伝記であり、覚範が所属する黄龍派に手篤い。日本では中世に五山版が流行し、近世江戸時代には寛永版が広く読まれた。また覚範の詩文

慧洪と称す。以後、經学を修し雲庵克文に師事。二九歳、東吳(蘇州)に遊学し、翌年衡岳(湖南)に移り遂に開悟。以後は、住持・投獄・剝僧・復歸・講述・投獄・流配・恩赦・入獄・釈放などを繰り返す間、『林間録』二巻、『禅林僧宝伝』三〇巻等を著し、建炎二年(一一二八)、同安院で示寂。世寿五八。他に『智証伝』『冷齋夜話』各一〇巻、『石門文字禪』三〇巻が有名。

特に宣和四年(一一三二)に成る「禅林僧宝伝」三〇巻は、唐末〜北宋期(九世紀末〜十二世紀初め)までの約二五〇年間に江西を中心に活躍した禅僧八一名の伝記であり、覚範が所属する黄龍派に手篤い。日本では中世に五山版が流行し、近世江戸時代には寛永版が広く読まれた。また覚範の詩文

慧洪と称す。以後、經学を修し雲庵克文に師事。二九歳、東吳(蘇州)に遊学し、翌年衡岳(湖南)に移り遂に開悟。以後は、住持・投獄・剝僧・復歸・講述・投獄・流配・恩赦・入獄・釈放などを繰り返す間、『林間録』二巻、『禅林僧宝伝』三〇巻等を著し、建炎二年(一一二八)、同安院で示寂。世寿五八。他に『智証伝』『冷齋夜話』各一〇巻、『石門文字禪』三〇巻が有名。

特に宣和四年(一一三二)に成る「禅林僧宝伝」三〇巻は、唐末〜北宋期(九世紀末〜十二世紀初め)までの約二五〇年間に江西を中心に活躍した禅僧八一名の伝記であり、覚範が所属する黄龍派に手篤い。日本では中世に五山版が流行し、近世江戸時代には寛永版が広く読まれた。また覚範の詩文

慧洪と称す。以後、經学を修し雲庵克文に師事。二九歳、東吳(蘇州)に遊学し、翌年衡岳(湖南)に移り遂に開悟。以後は、住持・投獄・剝僧・復歸・講述・投獄・流配・恩赦・入獄・釈放などを繰り返す間、『林間録』二巻、『禅林僧宝伝』三〇巻等を著し、建炎二年(一一二八)、同安院で示寂。世寿五八。他に『智証伝』『冷齋夜話』各一〇巻、『石門文字禪』三〇巻が有名。

特に宣和四年(一一三二)に成る「禅林僧宝伝」三〇巻は、唐末〜北宋期(九世紀末〜十二世紀初め)までの約二五〇年間に江西を中心に活躍した禅僧八一名の伝記であり、覚範が所属する黄龍派に手篤い。日本では中世に五山版が流行し、近世江戸時代には寛永版が広く読まれた。また覚範の詩文

慧洪と称す。以後、經学を修し雲庵克文に師事。二九歳、東吳(蘇州)に遊学し、翌年衡岳(湖南)に移り遂に開悟。以後は、住持・投獄・剝僧・復歸・講述・投獄・流配・恩赦・入獄・釈放などを繰り返す間、『林間録』二巻、『禅林僧宝伝』三〇巻等を著し、建炎二年(一一二八)、同安院で示寂。世寿五八。他に『智証伝』『冷齋夜話』各一〇巻、『石門文字禪』三〇巻が有名。

特に宣和四年(一一三二)に成る「禅林僧宝伝」三〇巻は、唐末〜北宋期(九世紀末〜十二世紀初め)までの約二五〇年間に江西を中心に活躍した禅僧八一名の伝記であり、覚範が所属する黄龍派に手篤い。日本では中世に五山版が流行し、近世江戸時代には寛永版が広く読まれた。また覚範の詩文

慧洪と称す。以後、經学を修し雲庵克文に師事。二九歳、東吳(蘇州)に遊学し、翌年衡岳(湖南)に移り遂に開悟。以後は、住持・投獄・剝僧・復歸・講述・投獄・流配・恩赦・入獄・釈放などを繰り返す間、『林間録』二巻、『禅林僧宝伝』三〇巻等を著し、建炎二年(一一二八)、同安院で示寂。世寿五八。他に『智証伝』『冷齋夜話』各一〇巻、『石門文字禪』三〇巻が有名。

特に宣和四年(一一三二)に成る「禅林僧宝伝」三〇巻は、唐末〜北宋期(九世紀末〜十二世紀初め)までの約二五〇年間に江西を中心に活躍した禅僧八一名の伝記であり、覚範が所属する黄龍派に手篤い。日本では中世に五山版が流行し、近世江戸時代には寛永版が広く読まれた。また覚範の詩文



津波被害 岩手県田老漁協

「被爆ハマユウ・クラブ」ではどのような活動をされていますか。

被爆ハマユウとは、広島県の爆心地のそばに植えられていたインドハマユウという品種の花です。爆心地から二キロという近距離でありながらも、兵舎の陰で直撃を免れ被爆後も枯れなかった白いハマユウを見つけたのは、尾島良平さんという当時の曹長でした。そのハマユウを掘り起こし鎌倉の実家に持ち帰った尾島さんは、増やしたハマユウを「破魔勇」という漢字に置き換えていました。魔を打ち破る勇ましい当てる字に、尾島さんの信念のようなものが感じられると思います。ハマユウを自宅に植えるだけでなく、被爆者の墓前など別の場所に植える活動を始め、今でも広島市の平和記念公園や大船観音の被爆慰霊碑などに尾島さんが植えたハマユウが咲いています。一九七九年に尾島さんが他界された後は、息子さんが活動を引き継いでいました。私はその話を聞いた時に息子さんを訪ねて、少しでも力になれたらと思う、一九九五年に「被爆ハマユウ・クラブ」

「最後に、西村さんご自身が大切にしていることを教えてください。」

大切にしていることは、これまでたくさんの方にお世話になったことから、人との関係性です。仏教でもいわれる自力と他力に加えて、仲間の力である「衆力」も欠かせない力でしょう。各自が力を伸ばしながら、仲間同士で持ち寄る力も求められていると思います。それらを強めるには自分と他者の関係性を高めること。今を生きている人か、もしくは過去に生きていた人、あるいはこれから未来を生きている人も含めて、関係性を大切にしたいものです。

同行二人(どうぎょうにん)という言葉は、お遍路さんがいつも弘法大師と巡礼するように、思いを同じにする大切な人と気持ちの上で共に生きることを意味します。私も、すでに亡くなった方も含めた大切な同行二人からいつも力

名を里子にし、コロナ禍前は毎年のように訪問してました。現地の市民団体を通じて文房具や制服などを寄贈する制度で、今では同じ仲間も増え、そうした里子が全部で60名ほどいます。また、前回の訪問時は中学生の孫を連れて行きました。孫だからといって価値観を押し付けるつもりはありませんが、少なくとも世界は広いことや、国が違えば社会通念が大きく違うことなどを感じてもらいたい、将来へのヒントにしてもらいたいという誘いがありました。これまでも妻とフイリピンやネパールなどに行きまわりましたが、娘二人とはスリランカにも一緒に訪問しました。スリランカでは現地の友人宅に泊めてもらうことが多い

新しい手帳をおろす時、父母を含め過去に恩義を受けた方々の名前、これまでお世話になった方や地名、例えば子ども頃の頃に裸で魚を採って遊んだ高知の仁淀川など、自分の縁のあった名称を書き綴り、時間がある時にはそれを眺めて思いを馳せています。多くの関係性の中で自分が生かされていることを自覚できるとともに、私なりの広い意味でのお経のような存在を綴っているんです。これまで様々な場で色々な考え方に触れてきましたが、仏教とは中心にありや生活そのものに関係するものだと思います。時代や生活が現代のものに変化しても、変わらない本質があります。自分自身も同様で、色々なことをやりながら豊かに生きてくれているんじゃないかと思ったり、暮らさずと大勢の人が自分なりに実践を積み重ねていくことが、世の中を前進させるのではないのでしょうか。

お釈迦様はかつて、「生きるために頼りにするものは何か」と問われた際、自灯明(じとうめい)と答えた。つまり自らを灯して己を照らすことだと言われたので、大変素晴らしい教えだと思いました。一人ひとりが自己の内的な力によって発達する内的必然性という言葉があります。子どもでも高齢者でも障がい者でも誰でも、発達する力は常に各自の内部にあるんですね。誰かにこうすべきだ、と言われて何かをするの



スリランカの学校へ被爆ハマユウを寄贈

では長く続きません。自分を成長させ続けることでまた、誰かとの関係性も育めるはずですが、そうした意味では、私に書かせてもらった本を手にされた方が、何かその人らしく幸せに生きることができれば大変嬉しく思います。

もつと個人的な思いとしては、荒凡夫(あらぼんぶ)への憧れも抱えています。荒(あら)は決して荒々しいという意味ではなく、自由であることという意味で、自由で平



被爆ハマユウの花

を作りました。以来、原爆や戦争に関連する団体や施設、または平和を願って活動されている様々なところに被爆ハマユウを植える活動を続けています。沖縄の伊江島にある反戦平和資料館「命宝(メチドウタカラ)の家」や、原爆で焼かれた広島でくすぶっていた火をカイロの炭に移して持ち帰った福岡県星野村の故山本達雄さん宅など、つい先日は世田谷の永正寺にも植えていただきました。花が咲く時期になったら、檀家さんたちに喜んでもらえるのではないかなと思います。また国外にも同じように被爆ハマユウを繋いでいます。広島では当時、たくさんの朝鮮半島の出身者が原爆の被害を受けました。戦後帰国された被爆者は二万人以上いて、韓国の原爆被害者協会にも被爆ハマユウを植えました。その他にも台湾や、スリランカの小学校、枯れ葉削被害者の出たベトナムの施設、ネパールの病院などに届けました。

「平和や被爆などをテーマに国内外の各地へ行かれると、どんなことを感じられますか。」

戦争や自然災害など、世界には様々な不条理の元で生きる人たちがいます。ネパールではいまだに厳しいカースト制度があり、最も低い不可触民としてダリットと呼ばれる人たちは、十分な教育も受けられず、生活に必要な収入が足りません。私はダリットの子どもたちの勉学支援で一〇



カースト制度の「ダリット」の里子支援。右隣はお孫さん(ネパールにて・2018年)

ため、仏教が生活に根ざしていることがよくわかり、自力で悟りを開く上座部仏教の経典は子どもでもわかるように現地語で普及しています。仏壇はいつもきれいな花が飾られていて、それは「蕾から咲いて枯れるまでの花の一生に、我が身を重ねるために供える」と教わった時は、なるほどそういうものかと感心したことを覚えています。一方で、ネパールで訪問したお寺は、大乘仏教と上座部仏教の仏塔が同じ境内にあり、画一的な教団仏教でなく非常に柔軟で驚きました。ヒンドゥー教と仏教の境目も曖昧で、幅広い民族性による土着の民衆宗教が根強いように感じました。各地で人々と宗教の関係性

に触れて思うのは、人間は支えが必要であることです。気持ちが落ち込んだり、物事がうまくいかない時、あるいは天気が悪いだけで気持ちが沈むことだってあります。心身の健康や成長のためには、宗教、または宗教のようなものに支えられる必要があるのではないのでしょうか。とはいえず、絶対的存在である神とのつながりを説く伝統宗教と、風や稲妻などの自然現象や山と樹木などの自然界に神が宿るとされるアニミズムでは大きく異なります。原始仏教の経典を讀むと、お釈迦様は絶対者を否定していることが書かれています。人間は長い歴史の中で大変な進化をしてきたが、進化した分幸せになつたのかといえは、そうとも言いが切れません。学者はそれぞれに自論を説きますが、人が生きる社会には矛盾だらけいくつも存在するのです。個人的には、長い歴史の中で民衆は時に不条理に晒され、苦しんで思い通りにならない中で、自然界に救いを求めてきたのでしよう。それがいつ



2015年ネパールの里子支援で文具を届ける

編集後記

藤木隆宣



十月十九日、二十日と通夜、葬儀が久しぶりにあった。お骨が上がるまでの時間に奥さんが、「今日は和尚さんに良いいお経をあげていただき主人(九十歳)も安らかに旅立ったことと思います」と話された。お通夜では修証義を一章から三章までを参列者全員でお読みして、通夜説教で一仏両祖のことや修証義のことをお話ししていただいたので頭の片隅に残っておられたのかもしれない。曹洞宗は道に迷えば修証義に戻って振り返りますと話した。

この御夫婦には二〇数年前に生前戒名をお授けしてあった方でした。奥様からご主人が生前戒名をずっと大事にしていたとお聞きし、生前戒名が仏教徒としての安心を得ておられたのだと思つた。お寺とは近くないところにお住まいでしたから、日常的にはあまりお付き合いがなかった方でしたが、毎年四回(春、夏、秋、冬)行事案内などを兼ねたお寺からの便りと『曹洞禅グラフ』を三十年以上送り続けているのが良かったのかもしれない。

亡くなったご主人は奥さんが困らないようにエンディングノートを書いておられ、お寺や連絡先などを綿密に残してあったのでお亡くなりになってすぐにご連絡があった。しかし多くは次の世代への連絡をしていないために、葬儀が発生すると混乱して葬儀屋さんや、互助会さんのペーసుになり、後でご連絡を受けることがある。核家族は都会・田舎を問わず定着したが、都会地では次世代の方がお寺との付き合いを知らなくて、後日菩提寺があることに気付く例も多いのではないだろうか。各寺で対策が必要かもしれない。奥様からほかの方には話せないことをお骨が上がったまでの四〇分ぐらいではあったがお伺いできた。お互いが再婚同志だったようで普段は話しづらい内容ではあったが、和尚さんに聞いてもらって少し楽になったとも言っておられた。このようなことは、全国のご住職は多く体験しておられることと思うが、このような時だからこそお話が聞けたのかとも思う。普段言えないことを吐露されるタイミングなのかもしれない。喪主に向き合える大事な時間と感じた。

コロナ禍の間少し連絡が途絶えていた御家に電話を入れた。久しぶりなので電話口ではあったが、電話の大切さがわかった。住職と話が出来たことを喜んで頂き、ご主人が以前のよう元気な状態ではないことや、私が気になっていた方が亡くなり少し遠い方だったの近くの曹洞宗のお寺様とご縁が出来たことのお話なども伺えたので電話でお話しすることもいいことだと感じた。まだまだ電話する方は多いので少しずつやっていきたい。

2022春・お彼岸号特集予告

2022年2月10日 発刊予定

曹洞禅グラフ

160号

現代の葬儀が変化をみせている今、弔いについて考える

ルポライター・画家 高橋繁行氏インタビュー

たかはし しげゆき

1954年、京都府生まれ

『土葬の村』(講談社現代新書)

『ドキュメント現代お葬式事情』(立風書房)

『看取りのときーかけがえのない人の死に向き合う』(アスキー新書)他著書多数。

仏教企画通信

ご支援寺院名

R3.8.2~R3.10.2

Table with 3 columns: 所在地, 寺院名(個人名), 金額. Total amount 3,000.

手まり学園

寄附者御芳名

R3.8.2~R3.10.2

Table with 3 columns: 所在地, 寺院名(個人名), 金額. Total amount 25,000.

てまり学園にご支援をいただき誠にありがとうございます。

仏教企画発行の刊行物

(*部数により割引があります) すべて税別価格です

- List of publications with prices: 『修証義』解説 丸山劫外著 1,400円★, 『うたい継ごうよ、子守唄』 長田暁二・西館好子共著 1,200円★, 『まんが問答一期一話』 文平和宏昭 まんが垣内敬遠 1,200円★, 『葬送のしおり』 長井龍道著 30円, 修証義読本『生老病死』 須田道輝著 500円★, 『曹洞宗檀信徒經典』 須田道輝解説 300円★, 曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』 霊元丈法著 140円★, 曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』 霊元丈法著 150円★, 随想集 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って 500円, 『観音の咒 大悲心陀羅尼』 渡辺章悟著 500円

*『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

曹洞禅グラフ

発行日

Table showing subscription rates for '曹洞禅グラフ' based on the number of issues (9 issues or less to 500+ issues).

観音の咒 大悲心陀羅尼

渡辺章悟

発行所: 仏教企画 定価: 本体 500円+税

観音の咒 大悲心陀羅尼 渡辺章悟著

お求めは下記お申込先までご連絡ください

お申込み

〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5 TEL: 042-703-8641 FAX: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

仏教企画

※ご寺院名後の番号(3桁もしくは4桁)がお客番号(コード)になります。お申込みは ①ご寺院名 ②お客番号 ③電話番号でも可能です。